

# Lib.

京都産業大学図書館報  
v. 38, 増刊号 (Dec. 22, 2011)

発表！！

第7回京都産業大学図書館  
書評大賞

入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品ならびに講評	
<大賞>	4 - 5
<優秀賞>	6 - 11
<佳作>	12 - 21
アンケート・統計・概要	22 - 24

# 入賞者発表

第7回京都産業大学図書館書評大賞には122名125篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の50音順



## 大賞

氏名 (所属)	書評タイトル 『書評対象図書』
まつき ありさ 松木 亜里紗 (外国語学部ドイツ語学科 4年次生)	『真珠の耳飾りの少女』を読んで 『真珠の耳飾りの少女』



## 優秀賞

おおさわ やちよ 大澤 八千代 (経営学部経営学科 3年次生)	日本の未来を生きるために 『新・日本の経営』
はちけん らいと 八軒 来人 (文化学部国際文化学科 4年次生)	言葉の先にあるもの 『Tugumi』
やしき まさゆき 屋敷 雅之 (経営学部会計ファイナンス学科 2年次生)	差別を生く、彼らの覚悟 『Go』



## 佳作

おおた わか 大田 和香 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『砂漠』を読んで 『砂漠』
しみず だいき 清水 大樹 (経営学部会計ファイナンス学科 2年次生)	「手紙を書く」ということ 『恋文の技術』
とだ はるか 戸田 知香 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『ポプラの秋』を読んで 『ポプラの秋』
ひらお ゆうすけ 平尾 悠祐 (文化学部国際文化学科 2年次生)	新たな逃亡劇作品 『ゴールデンランバー』
よこい たかあき 横井 隆明 (文化学部国際文化学科 4年次生)	『青年は荒野をめざす』 『青年は荒野をめざす』

## 選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 瀬尾 美鈴

京都産業大学図書館書評大賞も本年で第7回目を迎えました。本学図書館書評大賞の目的は、学生の読書の推進と、書評を書くことを通じて文章力と論理的思考能力を培うことです。

入賞作品の選考は図書館長、図書館委員会委員（教員）5名、図書館職員5名の計11名で構成する、図書館書評大賞選考委員会によって行いました。第1回委員会を4月27日（水）に開催し、応募要領や情宣活動、選考過程等々を審議・決定しました。7月6日（水）には、芥川賞受賞作家である川上未映子氏を招聘して図書館書評大賞講演会を開催しました。川上氏は『本の引力』という題目で講演され、ご自身でも新聞の書評委員を務められていることから、「自分の問いを持つこと」と、「書評では、作者は何がいいのか、自分の目でとらえ直すこと」が大事とのメッセージを戴きました。図書館ホールには、川上氏の作品のファンだという学生も多く出席し、熱気を帯びた講演会となりました。

本年度の書評応募総数は締切日9月30日（金）で125篇ありました。応募者数は122名で、昨年の118名とほぼ同じ多数の応募をいただきました。この場を借りて、応募者全員にお礼申し上げます。

10月5日（水）開催の第2回選考委員会において、一次選考対象作品を112篇としました。一次選考対象作品を、教員委員と職員委員の2名一組が各自で精読し、二次選考作品26篇を精選しました。二次選考では、11名の全委員が全26篇をあらためて熟読し、1)日本語表記・文体・構成、2)内容の要約、3)批評する力、についてそれぞれ採点しました。11月18日（金）の第3回選考委員会では、各委員の評点の合計をもとに、点数だけでなく内容としても入選作としてふさわしいかどうかを討議し、上位9篇を選考しました。

このような審査の結果、今年の大賞作品1作品と、優秀賞3作品、佳作5作品が選ばれました。入賞者諸君には、心よりお祝い申し上げます。入賞の喜びを、周囲の皆様と分かち合ってください。また、授業等で学生に書評大賞への応募をお勧めいただいた教員の方々にも深くお礼申し上げます。

名誉ある大賞には、外国語学部4年次生の松木亜里紗さんの『真珠の耳飾りの少女』を読んでも選ばれました。物語の背景となる文化圏の歴史や人間への深い理解が感じ取れる松木さんの文章に、多くの選考委員が魅了されました。また、特筆する点として、優秀賞入賞の八軒来人君は3年連続の入賞、屋敷雅之君は2回目の入賞となりました。二人の継続的な努力に敬意を表します。

全体講評として気づいた点を述べますと、本年度の応募作品の多くは、「読むと楽しいから」ということを対象図書のおすすめ理由としてあげていました。最初の一步としては、それで良いのだと思います。次のステップとしては、大学生として、自分とは異なる考え方を学べる本などにも書評を書けるように、すなわち自分の窓口を広げ見方を変えるような難しい本にも挑戦するようになっていただきたい、と思います。応募者の皆さんのさらなる成長に期待しています。この書評大賞に応募することをきっかけとして、多くの本を読んで読解力や論理的思考力を高め、自己の精神的基盤の形成に役立てていただけるなら、私ども書評大賞選考委員としてこれにまさる喜びはありません。

選考にあたり、講義や研究活動でお忙しい中、ご尽力賜りました教員委員と図書館職員委員に感謝申し上げます。

最後になりましたが、協賛いただきました丸善株式会社・株式会社紀伊國屋書店・株式会社雄松堂書店の皆様にも厚くお礼申し上げます。



大賞

まつき ありさ  
松木 亜里紗

書名：『真珠の耳飾りの少女』

著者：トレイシー・シュヴァリエ著，  
木下哲夫訳

出版社・出版年：白水社，2000

### 「『真珠の耳飾りの少女』を読んで」

暗闇に浮かび上がる一人の少女。丸く柔らかそうな頬に、薄く開いた艶やかな唇。見る者の目を捉える美しい瞳に、鮮やかなターバンの青。北欧のモナリザとも称されるフェルメールの傑作「真珠の耳飾りの少女」だ。今回読んだ『真珠の耳飾りの少女』は、まさにこの絵の中の少女が物語の主人公になっている。

少女の名はフリート。父親が事故で失明してしまったために、家計を助けるため画家のヨハネス・フェルメールの家で使用人として住み込むこととなる。買い物や洗濯などフェルメール家で朝から晩まで仕事に追われる日々。そんななかで、ある日フリートはフェルメールのアトリエの掃除を任された。これをきっかけにフリートは絵に対する好奇心を持つようになり、やがてフェルメールに芸術家としての尊敬の念と淡い恋心を抱くようになる。一方フェルメールもフリートの感性に刺激され、妻に内緒で絵の具の調合の仕事をフリートにまかせるのだった。二人の間には信頼関係が芽生え、次第にお互いに惹かれあっていく。

実際のところ、この絵のモデルが誰であったのかははっきりとしていない。一方この小説では史実に基づいた部分も多く含まれる。この小説の面白いところは、史実をうまく脚色して人間関係を描いているところだ。どこまでがフィクションでどこまでが史実なのか、この物語は、フェルメールという人が実際どのような人物だったのかということにも関心を持たせてくれる。作品のなかで彼の容姿や身なりが描写されている部分はほとんどなく、いまだ知られていない彼の人物像は読者の想像に委ねられている。だが、フリートの視点で書かれたこの物語を読み進めるうちに、読者は次第に彼女に感情移入しながら、フリートの接するフェルメールと一緒に感じる事が出来る。

さらに、実際にフェルメールの描いた作品が物語のいたるところで登場するところもこの物語の見どころだ。この小説は、話の流れを楽しませてくれるだけでなく、フェルメールの絵画を見ること自体も楽しませてくれる。たとえばフリートの先輩である使用人のタンネケは、作中では「牛乳を注ぐ女」のモデルになったとされている。そのことをネタに賢いフリートはうまく先輩の機嫌を取る。パトロンのファン・ライフェンは「二人の紳士と女」をフェルメールに描かせ、一緒にモデルになった女中の体を奪ってしまう。そしてさらにフリートにも狙いをつけ、彼女を絵のモデルにと要求し、これが、フェルメールがフリートを「真珠の耳飾りの少女」として描くきっかけとなるのだった。また「真珠の首飾り」のモデルになったフェルメールの妻カタリーナは、二人の距離が縮まることを嫌悪し激しく嫉妬する。私は物語の中で、

フェルメールの絵が人間関係とうまく絡んでいると感じた。今までなんの知識もなく見ていた絵を、こうした人間関係が背景にあるのではと想像しながら見てみると、また違った見え方がするものだ。たとえこの小説がフィクションでも、この小説を読み終わったあとにフェルメールの絵をみていくと実に面白い。

この小説は2003年に映画化されており、アカデミー賞の3部門にノミネートされた。小説が苦手な人は、こちらから見てみるのもいいだろう。作品の静かな雰囲気はそのままに、主人と使用人の絶対的な関係や低所得階級の独特の活気といった、当時のオランダの時代背景や生活観を画面越しに垣間見ることができる。しかしながら、映画では台詞が少ない分説明不足に感じる点が多く、やはり物語を楽しむには小説を読むべきだろう。肉屋の少年とフェルメールの間で揺れ動くフリートの恋心、カタリーナの嫉妬とライフェンの策略でフリートが次第に追い詰められていくクライマックスの緊迫感は小説でしか味わえない。この小説を読んだら、きっともう一度「真珠の耳飾りの少女」の絵を見返したくなるだろう。埃っぽい、絵の具のかおりのするアトリエ。暮れなずむ部屋に、ひとりたたずむ少女。その少女が一瞬、こちらを振り返る。この小説は、フェルメールによって永遠に閉じ込められた少女の一瞬の絵の前から、フェルメールとフリートのいる静かなアトリエに私たちを連れて行ってくれる。

### 選考委員による講評

### 選考委員代表 文化学部教員 森 哲郎

書評の不思議な魅力は、何よりもその作品へと読者を誘う評者の熱い思いと巧みな工夫にあるのではなからうか。その点で、松木さんの次の冒頭の切り出しに驚嘆してしまった。

「暗闇に浮かび上がる一人の少女。丸く柔らかそうな頬に、薄く開いた艶やかな唇。見る者の目を捉える美しい瞳に、鮮やかなターバンの青。北欧のモナリザとも称されるフェルメールの傑作「真珠の耳飾りの少女」だ。今回読んだ『真珠の耳飾りの少女』は、まさにこの絵の中の少女が物語の主人公になっている。」この冒頭のみならず、フェルメール絵画の魅力を上品に写し取ったかのような、この小説世界の魅力を、実に見事に松木さんは伝えている。画家の家の下女として働く少女がアトリエの掃除を介して絵の世界に目覚め、「やがてフェルメールに芸術家としての尊敬の念と淡い恋心を抱くようになる」描写もうまい。さらに「史実をうまく脚色して人間関係を描いている」この小説の魅力を、次のように、「作品のなかで彼（フェルメール）の容姿や身なりが描写されている部分はほとんどなく、いまだ知られていない彼の人物像は読者に委ねられている。だがフリート（少女の名）の視点で書かれたこの物語を読み進めるうちに、読者は次第に彼女に感情移入しながら、フリートの接するフェルメールと一緒に感じる事が出来る」と看破している。

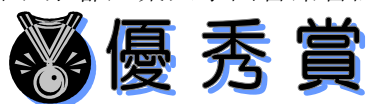
フェルメールの絵画作品に見識のない読者でも、この小説を通して、彼の芸術創造の秘密を一瞬見たような錯覚を抱くのは、モデルの少女の眼を通して、凝視する画家を逆に凝視できる少女の気持ちへの共感のゆえであろうか。最後のクライマックスを喚起することになる「白い真珠」の秘密にも言及できればという願望も湧いてくるが、きっと「書評」の抑制を守ったのだろう。この「少女が一瞬、こちらを振り返る」アトリエに読者ともども居合わせたかのような不思議な臨場感を抱かせてもらえる素敵な書評であると思う。

### 入賞者から一言



賞をいただけるまでとは正直思っておらず、私のつたない作品を選んでいただき嬉しく思っております。ありがとうございました。今回の書評大賞参加を通じ、読書後に感想や論評を自分なりに文章にすることの大切さを改めて感じました。また、この賞をいただけたのは、応募を勧めてくださった高山先生のおかげです。この場をお借りしてお礼申し上げます。

第7回 京都産業大学図書館書評大賞



経営学部 3年次生

お お さ わ や ち よ  
大澤 八千代



書名：『新・日本の経営』

著者：ジェームス・C・アベグレン著，  
山岡洋一訳

出版社・出版年：日本経済新聞社，2004

### 「日本の未来を生きるために」

本書は、「日本的経営」という言葉を生み、それが終身雇用・年功序列・企業内組合であると説いたジェームス・C・アベグレンが今後の日本企業もしくは社会の進む方向を示した書である。この日本企業の方向を示すために、英企業を客観的に分析すること、日本の成功した電機会社や鉄鋼産業の分析が行われている。経営という言葉がタイトルになっているが、先にも述べたように企業だけではなく日本の社会や経済成長にも議題は広がり、広義の経営という意味が込められている。そして、今後の日本は量での勝負ではなく、質で高付加価値を追求する体制をとるべきであり、東アジアとして世界の中心になっていくべきであると論じられている。アメリカが世界を独占してきた流れは止まり、欧州や東アジアが独立して行動する可能性を示している。

本書の特徴は、決してネガティブな議論ではなく、現在日本で起きている問題について、冷静にどうしたらよいかという解決策を提示している点である。例えば、世界で起きている少子高齢化の縮図とも言える状態にある日本は、経済成長が止まってしまうのかという問いに対し、答えを出している。それは労働者の引退する年齢を引き上げること、女性がより社会に進出すること、ロボットを生かし労働力をカバーするといった方法を挙げている。これらは、途方もない計画でもなければ、すぐにでも取りかかるとのことのできる方法である。逆に、大量の移民を受け入れるというような案に対しては、古くからの単一民族である日本人にとっては多大なるストレスになり、必ず問題が起こるとしている。このように、日本の選択肢として不可能で、その後の負担になる方法については冷静に批判している。

本書は非常にシンプルに書かれていることから、頭の中に内容が入り込みやすい。良い点は良い点、悪い点は悪い点ではっきりと示されており、頭ごなしに著者の意見を押し付けていない。また、研究者でありながら庶民に近い考え方も持っていることから、どこか馴染みやすい感覚を覚えた。それは、フリーターに対する考えが記されている部分から読み取ることができる。正社員を目指すことなく、アルバイトをしながら自らの夢を追い求めている若者がいるのは、社会が豊かな証拠であり、一概にフリーターの批判をしない点から見る事ができた。ただ単に数字を読み取り、定職につかない若者がいるから日本の経済成長が止まるという考えとは逆であり、どこかほっとする印象を受けた。以上のことから本書は経営について学んでいな

い若者でも気軽に読むことができる書だと考える。

唯一本書を批判する点があるならば、締めくくりで政治の問題を挙げていることだ。中国、韓国、日本が東アジアとして結束することで、世界の中心になると論じているがそのような外交の難題をこなすことのできる政治力が日本にあるのだろうか。党内すらまとまっていない日本の政治にこれだけの期待は無謀であり、期待はあまりできない。それまで、明確なロジックで日本の道を示してきた本書だけに、締めくくりの部分でこの不安な気持ちが残ってしまう点は腑に落ちない点であり、急に投げ出されてしまった感覚になる。

最後に、著者は長年に渡り日本の企業や経済を研究し、ついには日本国籍を取得している。つまり、良い点も悪い点も研究で明確な考えを持っている著者が日本に住みたいと考えているということを窺うことができる。それは、私たちにとっても自信につながり、日本は進むべき道を歩むことができるということを訴えている。日本は今後経済に成長はあるのか、このままでは日本は世界から遅れてしまうのではないかと不安になるかもしれないが、そんな気持ちが払拭される。批判的でネガティブなニュースが多い現代にも希望を持つことができる前向きな考えが記されている本書は、これから就職する我々の世代が、日本という社会に自信を持って出ていくためにも必要な書だと考える。

### 選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

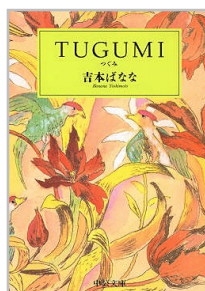
アベグレンのこの著作は2006年に刊行されているが、(amazon.co.jpには訳書に対する書評は10あるがamazon.comには書評が1つもないところを見ると)日本で評判が良く海外では無視されたようだ。これは、日本への関心が薄れていることと、読者がこの本の内容に新しさを感じないためだろう。とはいえ2007年に死去したアベグレンの考察のまとめとして本書を読むのは、2010年代の学生にとっても有意義だろう。じっさい日本的経営がどう理解されてほしかったかも米国式経営についての著者の危惧も知ることができる。ただし、「この本を読んで、日本に自信を持てた。ほっとした。」では願望を確認するための読書になる。アベグレンも日本の若者に根拠なく安心感を与えるためにこの本を書いたのではなかろう。最近(かつては欧米ばかりだった)研究上の出張先が中国や東南アジアになってきて思うのだが、この地域の大学教育は質・量ともに非常に充実してきている。将来の同僚や競争相手と伍していくのに十分な、根拠のある自信をつけてほしい。書評者には、今回の入賞を励みにいっそうの勉学を期待する。

書評としては、日本経済の将来のための対策として普遍性のあること(高齢者の活用・女性の社会進出・機械による労働の代替)に肯定的に言及していることと、本書の内容に基本的に同意しつつも、最後が政治頼みでは不安だと批判的な論点を加えたのがよかった。

### 入賞者から一言



優秀賞をいただき、大変嬉しく思います。現在日本はTPPの問題や震災からの復興など変化が求められています。変化ばかりで不安になるかもしれませんが、本書からは日本には底力があるということを実感することができました。まだまだ日本はこれからです。私たちのような若い世代が日本はどのように変化したかを振り返ることで、未来の日本に繋がると 생각합니다。今後も本を読むことで新たな価値観を広げてあらゆる世界を見ていきたいと思っています。


 はちけん らいと  
 八軒 来人


書名：『Tugumi』

著者：吉本ばなな

出版社・出版年：中央公論社，1992

### 「言葉の先にあるもの」

思い返してみれば、本書は中学生の頃に一度手に取ったことがある。そして途中で読むのを断念した。理由は簡単。つぐみの性格に嫌気が差したから。少しだけ私も大人になり、アルバイトの後輩に勧められて再び読んだ今夏の『Tugumi』。心の底から思った。やっぱりつぐみはいやな奴。それでも今夏のつぐみの見せた表情は、前よりも幾分美しく映った。何てことはない。私が少し成長しただけのことだろう。そう、つぐみではない。私が成長したからだ。

人は過去を美化するという。とりわけいやな思い出ほど人はそれを良い思い出に変えてしまうという。中学校時代のあの苦しい部活動の練習だって、当時の友達とこれからお酒を飲みに行ってしまうと「今となったら良い思い出だね」となる。つぐみの性格だって同じなのかもしれない。こんな性格の女の子、実際には居るはずがないのだが、読み終えた後に残るものはつぐみの暴言にも似た言葉。それでも読んでいる最中に訪れる「なんだ、こいつは？」という感情は読後、微塵もない。今となったらつぐみも良い奴だったよね、とはすぐにはならないかもしれないが、最後まで読んだ後あなたはもう一度つぐみに会いたくなる。そして本書をペラペラとめくり返し、つぐみの言葉を探してしまう。

「確かにつぐみは、いやな女の子だった」と少し強引な出だしで始まる本書は、つぐみのいところである白河まりあ、つぐみの姉である陽子、そして海辺の町でつぐみの両親が営む山本屋旅館が舞台のお話。つぐみのいところである白河まりあは、母が山本屋旅館の厨房を手伝っていることもありこの海辺の町で10年間を過ごす。つぐみはと言えば「生まれた時から体がむちゃくちゃ弱くて、あちこちの機能がこわれていた」ために彼女のことを家族は溺愛した。いや、甘やかし続けた。そして少し歩けるようにもなり、普通の生活ができる程度になったつぐみの性格は思い切り開き直ってしまった。まりあに言わせれば「人のいちばんいやがることを絶妙のタイミングと的確な描写でずけずけ言う時の勝ち誇った様は、まるで悪魔のようだった」とある。さらには容姿までも美しいとあるから、誰も止められるはずがない。つまり、つぐみとは、いやな奴の典型であった。

しかし、つぐみの性格が良い奴であるとかいやな奴であるとかを論ずることに本書はまったく意味を成さない。そしてそれは現代の多くの社会問題とも通じて言えることなのかもしれない。物事の善悪然り、選択肢は二つしかないのだろうか。文章であるならば行間、物事であるならば中身、それらすべてを考慮して物事の本質を導き出す。そして一つでもその本質に近づこうとするのが元来あるべき思考の姿であろう。本書『Tugumi』が読者に訴えかけるものもそれに近い気がしてならない。物語の終盤でつぐみは大好きな犬を地元の不良にさらわれて、そ



の仕返しにと彼女は突拍子もない行動に出るといふ事件が発生する。読者がその行動の是非をつぐみに問う前に、姉の陽子が事件を知ってつぐみに言い放った言葉に私はやられた。

「それじゃあ、生きてゆけないよ」

この姉妹にはどうしたって勝てないな、とこの一文を読んで私は痛感した。この直後につぐみは珍しく陽子に謝るのだが、この言葉足らずの一文に集約される姉陽子の想いに私はひどく心を痛めながら読んだ。体が弱く、いつ死んでしまうかも定かではないつぐみにおそらく初めて言った姉から妹への切実な想い。この事件の是非なんかより、もっともっと大切なことを妹に伝えてあげた美しい姉の姿。そして、それはまたつぐみ自身も実は欲していたのであろう言葉、愛情、叱咤であったはずだ。単なる甘やかしや叱責ではない、姉のまっすぐな気持ち。そしてラストに控えるつぐみの言葉に、読者は少し優しい気持ちになりながら彼女の人生観を知る。あ～、やっぱり最後までつぐみはつぐみなんだね。まりあと読者は気持ちを共有しながら、海辺の町の物語は最終章へと向かう。

本書は著者が毎年家族で訪れる西伊豆での思い出を下地に書き綴ったという約 20 年前の作品。著者の思い出が詰まっているとあって、海などの情景が描かれる場面は具体的で想像しやすい。何よりも選択する言葉が美しかった。改行も独特で、登場人物があえて言葉足らずにしている場面もあり、読者を最後まで飽きさせない。

おそらく私は数年後にまた本書を手にしたくなる時があるだろう。そう、まるで苦しかった思い出を美化するように、つぐみという人間に会いたくなるのだと思う。そのときにはまた、つぐみも違った表情を見せてくれるのだろうか。大学生、必読の一冊。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 諏澤 吉彦

時を経て同じ作品を読み返し、以前とはまったく違った印象を受けるということは、誰もが経験したことがあるだろう。評者もまた、この作品をとおして同じ経験をしている。そしてその理由を、自らが「少し成長しただけのこと」だと、率直に語っている。

評者は、主要な登場人物を、彼女らに対して自らが抱いた感情を表現することとおして、読者に伝えようとしている。しかも「いやな奴」とか「良い奴」という単純な感情ではない。評者が時を重ね成長することによって変化してきた感情をとおして、登場人物の複雑な性格を表現している。いっぽうで、ストーリーの核心には決して触れることはなく、謎を残しながら、軽妙な文章で巧みに読者を誘っている。また、「過去の美化」という自らの体験を、この作品の下地となる著者の「思い出」に重ね合わせて、物語が繰り広げられる海辺の町の風景の美しさをも伝えている。

この作品に触れる過程をとおして、評者は一貫して言葉の陰に隠れた「物事の本質」を読み取ろうとしているように思える。登場人物の語る、幾分言葉足らずで理解しにくい台詞から、語り手の生き様や人生観までも導き出そうとしている。そして、物語のなかではむしろ印象の薄い人物の「それじゃあ、生きてゆけないよ」という短い台詞に目を留め、そのなかに「まっすぐな気持ち」そして「切実な思い」を見つけ出している。

評者は、言葉に力を与えるものは何なのかを、まさに掴みとったのかもしれない。

入賞者から一言



この度は素晴らしい作品の中から私の書評を優秀賞に選んでいただき誠にありがとうございます。一昨年、昨年と佳作で悔しい思いをしていたので、今回の優秀賞は本当に嬉しかったです。これで心置きなく京都産業大学を卒業できます。三年間、私の書評を評価していただき本当にありがとうございました。人生の中でも大きな経験となりました。



書名：『Go』

著者：金城一紀

出版社・出版年：講談社，2000

### 「差別を生く、彼らの覚悟」

「僕は、日本で生まれ、日本で育った」

私たちは、少なからず「在日」について学んできているはずだ。私が「在日」について初めて学んだのは、小学校での人権学習の時であった。当時は、先生の話すことに耳を傾けていただけで、深く考えることがなかった。「差別」。私は、その言葉が持つ本当の恐ろしさを知らない。それは、同じ境遇に立たされた人にしか知りえない悲痛な言葉。あなたは、どうだろうか？この問題について真剣に考えたことがあるだろうか？

この物語の主人公である杉原は「在日朝鮮人」の両親を持ち、物心ついた時から「在日」と呼ばれて、蔑まれてきた。小中と民族学校に通い、「差別」という養分を糧に生活し、悪さに明け暮れる日々。ある日、オヤジが「在日韓国人」になった。「広い世界を見ろよ」。オヤジが放ったその言葉は、初めて彼に人生の選択肢を与えた。彼は「在日韓国人」になり、そして日本の高校へ進学した。しかし、そこは彼にとって敵の巣窟であった。その証に入学早々、初めての「挑戦者」が現れた。だが、その勝負はあっけなく杉原の勝利で幕を閉じ、それ以後、彼は高校三年間「二十三戦無敗の男」として君臨していた。やがて杉原に転機が訪れる。同級生である加藤の誕生パーティーに参加した時であった。杉原の前に一人の女の子が現れる。彼女の名前は桜井。彼女はとても可愛らしい「日本人」だった。彼は恋に落ちた。「これは僕の恋愛に関する物語だ」。その恋愛に、共産主義や民主主義など、一切の「主義」は関わってこない。

著者は金城一紀。本書は第123回直木賞受賞作である。また、映画化もされたため、知っている方もいるのではないだろうか。本書のテーマである「在日」について、これほどにも読者に伝えることができる作家は金城一紀しかいない、と私は思う。なぜなら、彼もまた「在日」であるからだ。本書は彼自身の経験を元に執筆された半自伝小説である。

先に記したあらすじを読んで、少し疑問を持ったと思う。恋愛？ そう、これは恋愛小説である。だが、忘れないでほしい。本書は、「在日」「差別」が最大のテーマであるということ。もし、それらのテーマが突出していたならば、本書の内容があまりにも重く、心にのしかかり、私は本書を途中で閉じていたかもしれない。しかし、そうなる事は無かった。私は本書の筆跡と主人公のキャラクターに魅せられていたのだ。それはまた、本書の最大の特徴といえる。物語は主人公の口調によって執筆され、主体的に描かれているのだ。本書には、小説によく見受けられる、物語を客観的なナレーションによって描かれる場面がほとんどない。よって、辞書で調べなくては意味が分からないような難しい言葉なども無い。文章の途中に、普段は耳にしないような「在日」が抱える難しい状況や単語が出てくるが、主人公が「つまらない話なので、

なるべく長くならないように説明しようと思う。できればユーモアも交えたいのだけれど、ちょっと難しいかもしれない」というような断りをはさむことで、退屈な説明であつたらうものが、彼の口調と折り重なって、緩和されている。また、杉原と桜井が会話する場面は淡々としていてテンポがよく、読んでいて面白かった。

本書には、印象深い場面や言葉がいくつも存在する。そのうちの一つが「僕たちは国なんてものを持ったことはありません」という言葉である。これは、主人公の親友である正一（ジョーンイル）が言った言葉だ。これは、あらすじに記したオヤジの言葉と同じ意味を持っている、と私は思う。日本の高校への進学を決めた際、杉原は教師からイジメを受けた。「売国奴」とまで言われた。しかし、杉原は揺るがなかった。正一が言い放った言葉がすべてを主張していた。僕たちには、生きるための選択肢がある。印象に残った場面や言葉は「在日」や「差別」に苦しむ彼らに強い希望をもたらすものばかりであつた。そして、著者もまた、私たちに「在日」について問いたただすのである。「彼らの覚悟は本物だ」と。

彼らは、日本で生まれ、日本で育った。日本語も話すことができる。しかし、日本人ではない。何が彼らをそうさせた？ この物語は彼らの青春時代にかけての思いと、杉原と桜井の出会いが、「在日」や「差別」を乗り越え、「国境」という垣根を越えて、「僕たちはどうあるべきか」を私たち読者に語りかけてくるのだ。『Go』これが本書のタイトルだ。私たちが、このタイトルの意味を知り、彼らと分かり合えた時、この物語は完結するのだ。

**選考委員による講評**

**選考委員代表 法学部教員 滝田 豪**

この書評では、本書の長所として、重いテーマを軽快に描写する著者の「筆跡」と、「主人公のキャラクター」が持つ魅力が挙げられている。また、本書のテーマが『在日』や『差別』や『国境』を越えて「僕たちはどうあるべきか」を問いかけることにあると指摘されている。

長所の一点目の具体的な例としては、平易な言葉、ユーモアのセンス、テンポの良さが挙げられている。一方、二点目の「主人公のキャラクター」については、必ずしも明確には述べられていない。私ならば、暴力的な典型的“不良”でありながら、考古学や人類学の書物を読破する“知性派”でもあるという、“イメージ”上のギャップを、その魅力の一つに数える。書評者はどうだろうか。

また、この二点の長所は、本書のテーマとも密接に関わる。軽快な語り口は重い問題を乗り越えることを可能にし、また主人公にそのような思考を可能にしたのはその“知性”だと考えられるからである。その意味で、書評における分析は非常に的確だと思う。

ただし、書評では差別や国境を乗り越えた先に「僕たちはどうあるべきか」という問いを見いだしているが、問いへの答えは触れられていない。私が本書を読んだ時はそこまで考えなかったこともあり、書評者が見いだした答えは何か、聞いてみたいと思う。

**入賞者から一言**



この度は私の書いた書評を優秀賞という形で評価していただき誠にありがとうございます。

今回は本書を読んだ自分自身の気持ちや思いをいかに具体的に読み手に届けるか、をテーマに書きました。

私の書評を読んで「一度、読んでみようかな」と思ってもらえたら嬉しいです。



# 佳作

お お た わ か  
大田 和香



書名：『砂漠』

著者：伊坂幸太郎

出版社・出版年：新潮社，2010

## 「『砂漠』を読んで」

社会という「砂漠」に囲まれた、わずかな学生時代という「オアシス」で私たちは何を考えればいいのだろう。「砂漠」に出たこともない私を含めた学生は、「オアシス」の中でどんなことを得ればいいのか。気がつけば大学生になっていて、あっという間に時は過ぎていく。そんな中で考えることは難しいかもしれない。

この作品は、そんな学生時代をテーマとして、ヒントを与えてくれるように思う。

物語は、主人公である「僕」こと北村が、大学入学早々行われるクラスの宴会で鳥井、南、東堂そして西嶋という4人と出会うところから始まる。ある日、北村と南、東堂の3人は西嶋から鳥井の部屋で行うという麻雀に誘われる。理由は名字に東西南北があるからだという。そこから5人は多くの時間を共にするようになり、彼らの学生生活を中心にこの物語は進んでいく。恋愛や麻雀、飲み会や何気ない会話を含め、日常を過ごす5人の学生生活は卒業に向かって進んでいく。そこに、彼らの周りで起こる通り魔事件、ボウリング対決や、集団強盗事件といった様々なエピソードが交えて描かれている。

強盗犯との対決や通り魔事件といった複数のエピソードにはつながりがあり、意外な結末が待っている。それがスパイスとなり、読者をハラハラさせてくれるのも魅力の1つ。是非、読んで確かめて欲しい。

しかし、私がより惹かれたのは5人の大学生らしい生活や会話。彼らの日々は躍動的に、勢いよく、とっつてもユーモラスに描かれている。彼らの会話はテンポよく進んでいき、内容もどこかリアル。1人1人の人柄や雰囲気は細かく描写されていて、私自身がそこに居合わせ、会話を聞いているかのように感じられるのだ。だからこそ、物語の動きに合わせて、読者である私の気持ちまで「僕」らと一緒に動かされる力がある。

中でも、特に印象的なのが、西嶋という男子学生。西嶋は、この作品での大きな役割を担っていると感じられた。しかし、彼の登場は強烈だ。彼は小太りで、「気持ち悪い」と言われてしまうような容姿の持ち主。クラスの宴会に遅刻した西嶋は、誰もしていない自己紹介をマイクで勝手に始める。野次を飛ばされても、彼はそんなことは気にしない。しかも遅刻した理由は麻雀で、世界の平和を願い、平和（ピンフ）を作るのに必死になっていたからだと言う。そしてしまいには、「あのね、俺たちがその気になればね」「その気になればね、砂漠に雪を降らすことだって、余裕でできるんですよ」と訴える。勿論、そんな人がいれば周りは、ナルシストなセリフだ、と白け呆れもする。読者の私だって、この登場にはそう感じてしまう。

しかし、彼と過ごすうち、「僕」たち4人の心と同時に私の心までもが無意識に動かされてい

たのだと、読み終わる頃に気付くのだ。

彼らの生活の中で、西嶋は多くの魅力を私たちにを見せてくれる。西嶋という男は、非難する人がいようと、保護期間を過ぎて処分されそうな犬をたまたま発見すれば1匹だけでも、迷わず引き取る。目の前で泣いている人がいれば、何も考えず手を差し伸べて助ければいいと信じているからだ。落ち込んでいる友達を前に、何も出来ない無力を味わっても、向き合うことから逃げない。また、ボウリングが下手で馬鹿にされたって、決して自分を恥じないし、次の日からボウリング教本を持ちストライクを取りに行く。彼は目の前の、どんなものにも臆さず、堂々としている。自分には「砂漠に雪を降らすことだってできる」と信じているのだ。彼がまっすぐ直球な男だと、ユーモラスな会話の中にも描写されており自分も信じてみたいと思わせる。物語が終わる頃に、読者もきっと思えるだろう。

私自身、「目の前のことに必死なんて」「社会はどうせこんなもの」と考えているのかもしれない。自分を信じる、ということを忘れ、恥ずかしくないように行動する。そうして大学生活をやり過ごしている。西嶋に、自分を信じ堂々としていることを忘れていて、と気付かされた。

私を含む学生には、友達との時間、勉強やボランティアやアルバイト、遊びや恋愛で大学生活を過ごす中でも、自分には出来ることがたくさんあって、出来る、という気持ちを根底に持つておくことが1番大切だと思う。この作品は、西嶋を通して「砂漠」の一步手前にいるうちに忘れてはいけない気持ちを暗示してくれている。「砂漠」に放り出されても、その気持ちを忘れてはいけないのだ。

「オアシス」にいる学生には勿論、西嶋のような気持ちを忘れかけている大人にも。この一冊で今の自分に向き合ってみてほしい。

### 選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

伊坂幸太郎は1971年生まれだが、1990年代生まれの若者たちにも同時代性を感じさせるようだ。大学生の悩みは時代を超えて共通なのだろう。若いときには、何をしても（勉強しても働いても遊んでも）何かを得る。だからこそ注意しないといけない。自分は自分の時間を最大限に活用しているか、他のことをすればもっと得るものがなかったかと。無駄になることを恐れてはいけないが、何をしても無駄にならないと全てを肯定してもいけない。書評者はこの作品から大学生活をどう送るべきか学ぶことがあったようで、喜ばしい。

書評者の読後の感想は自然だと思う。書評としては、作品に感動したり共感したり自分の反省とするだけでなく、作者の意図や作品が読者に与える作用について批判的分析が必要である。たとえば、この作品を伊坂の前作『魔王』への回答と考える読者もいるようだ。この正否はともかく、どのような文脈でもよいから、作品の位置づけなどあればよかったと思う。

### 入賞者から一言



このような賞をいただき、大変嬉しく思います。

書評を書くことで、より本の面白さを感じられ、また挑戦することの大切さも学ぶことができました。

私自身にとって、すごくいい機会になりました。ありがとうございます。



佳作

清水 大樹



書名：『恋文の技術』

著者：森見登美彦

出版社・出版年：ポプラ社，2009

### 「手紙を書く」ということ」

「新天地を求めて能登にやってきて以来、俺を心のよりどころとする迷える子羊たちからの手紙が連日舞い込み、俺は文通相手に事欠かない文通長者となった。返事を書くのに忙殺されて実験もままならぬ状況である。しかし俺は自分で播いた種は自分で刈り取る正義の人。この武者修行のような文通が俺の筆力を格段に上げることであろう。そしてゆくゆくは『恋文代筆』のベンチャー企業を設立してポロ儲けする。」

京都の大学から能登半島の人里離れた研究所へ送られた大学院生の守田一郎は、退屈さを紛らわすために「文通武者修行」と称して京都に住む友人や知人へ手紙を送る。

手紙の相手には、同じ研究室の友人、研究室の先輩、家庭教師をしていた少年、妹、片恋相手、そして、森見登美彦自身も作家として登場する。

京都から遠く離れた能登の研究所で守田は、「鬼軍曹」と呼ばれる研究員の谷口さんにしごかれながら、友人の恋愛相談にのり、先輩の思い付きによる数々のいたずらに翻弄され、新しく家庭教師になった女性を好きになってしまう思春期の少年を諭し、妹には兄をもっと尊敬しなさいと説き、仕事の愚痴をこぼす知り合いの作家には喝を入れる。そんな文通武者修行の日々を過ごしていく。そして武者修業の最中も京都では色んな珍事件が発生し、守田もしばしばそれに振り回されたり、実際に巻き込まれたりする。

この作品は書簡体小説で、主人公の守田一郎がそれぞれの文通相手に送る手紙の内容を通して物語が紐解かれていく。それぞれの文通相手への手紙が所々リンクしており、違う人への手紙を読むことで、一つの出来事について色んな視点から見るができる。読み進めていくと新しい事実が発覚したり、意外な人同士のつながりが見えたりしてくるのがこの作品の面白いところである。何人もの人への手紙を、時間軸を合わせながら、相手との関係性によって書き方も変えているのはさすがだなと思った。

文通武者修行の最中も守田が手紙を送ろうとして送れなかった人物が一人だけいた。それが、片恋相手の伊吹夏子である。第九話には、そんな送ろうとして送れなかった守田から伊吹さんへの失敗書簡集が載せられている。手紙を書いては読み直し、反省して次に活かそうとするのに、おかしな方向に舵を切ってしまう、恋文ではなく「濃い文」を完成させてしまう。そんな泥沼な試行錯誤を繰り返し、また、他の人達との文通や様々な出来事を通して守田は「手紙を書く」「文通相手がいる」ということについて考える。

森見作品の面白いところは、やはり独特の文体と個性豊かなキャラクターにある。みんなそれぞれ大真面目にお馬鹿なことをやってのけ、それを森見さんの独特の言い回しで面白おかし

く表現する。そこに惹かれて森見作品のファンになる人も少なくないだろう。

また森見さんの作品は自身の作品同士のリンク点も多い。例えば、森見作品四作目の『夜は短し歩けよ乙女』はこの作品の中では、第四話での守田の手紙の内容から一部キャラクターやアイテムを拝借して書き上げたことになっている。また、第五話の同じ研究室の友人、小松崎への手紙では、自身の処女作である『太陽の塔』の中で友人から失恋した主人公へ贈られる言葉を引用し、新たな解釈を加えて小松崎に怒りをぶつけた。このように自身の作品同士で、いろいろリンクしている部分が多く見られるので、著者の他の作品を読んでからもう一度この作品を読むと、また新たな発見があって面白いだろう。他にも色んな仕掛けがあちこちに散らばっているので、この作品も含めて森見作品を読む際には是非探してみたい。

この作品を読んで一番印象に残った部分は、最終話の伊吹さんへの手紙の中で、文通武者修行をするきっかけにもなった、小学生時代に始まり中学一年生に終わってしまった「赤い風船の彼女」との文通について記した部分である。

「なぜあんなにも夢中になったのであろうと考えるに、それは手紙を書いている間、ポストまで歩いていく道中、返信が来るまでの長い間、それを含めて『手紙を書く』ということだったからだと思います。(中略)かつて僕は正しい文通を知っていたはずです。文通の楽しさ、終わったときの切なさも、身体が覚えている。だから今、僕は文通に励むのであります。」

この手紙を書くことの楽しさについてはとても共感できた。メールが普及し手軽に相手へ言葉を送れるようになった現代でも、メールにはない手紙を書くことだけの楽しさがある。それに改めて気付かせてくれた。この作品を読むときっと手紙を書きたくなるだろう。たまには離れたところに住む友人や知人に何でもない近況報告の手紙を送ってみるのも良いかもしれない。

### 選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 諏澤 吉彦

最近、私事で手紙を書く機会はすっかり減ってしまった。私だけではないだろう。このような現代に生きる我々の多くに共通する行動傾向からみれば、やや古風ともいえる文章も交えた主人公の手紙の連続で成り立つこの小説には、手が伸びにくいかもしれない。しかも、書簡体小説の多くに見られるように、この作品も、手紙に断片的に<sup>は</sup>嵌め込まれた事実、場合によっては嘘を繋ぎ合わせて、物語の背景にある人間関係を見つけ出すことを、読者に求めている。読み取る力が要求される、骨の折れる作品であるかもしれない。けれども評者は、この作品を自らの目で読み解き、読者に楽しむヒントを提供している。そして評者は、この作品と他の森見作品との関係性、それらのなかでもこの作品の位置づけにまで触れている。平明な表現からは、冷静で客観的な観察過程が読み取れる。

さらにこの書評は、単に作品の紹介と推奨にとどまらない。むしろ本作品の読者たちが、離れて暮らす大切な人へ「手紙を書くということ」を改めて考えてみるこそ、評者が望んでいることであろう。

### 入賞者から一言



今回、このような賞をいただけたことを大変嬉しく思います。自分の書評をきっかけに『恋文の技術』や他の森見作品に興味を持ち、手に取ってくれる方が一人でも居てくださると幸いです。今後も沢山本を読み、いろんな文章に触れていきたいと思っています。この度はありがとうございました。



佳作



戸田 知香



書名：『ポプラの秋』

著者：湯本香樹実

出版社・出版年：新潮社，1997

## 「『ポプラの秋』を読んで」

「父は何のために死んだのだろう。おなかをすかせた人のために？ 人間のために？ 母のために？ それとも私のために？」

まだ幼かった頃に、父親を失った少女のふとした疑問が頭から離れなかった。人の死とは一体何だろうか。ある日突然これまで当たり前のように傍にいた人が、この世から消えていなくなってしまうということは、どういうことだろうか。本書では、当時夫を失ったことにより、虚ろになってしまった母「つかさ」と、そんな母をどこか遠くに感じながらも父の死を受け入れようとする主人公「千秋」の心の成長が、「ポプラ荘」の大家である「おばあさん」をはじめ、アパートに住む人々との記憶とともに鮮やかに描かれている。

あなたなら、もし「あの世にいる誰かに手紙を届けてあげよう」と言われたらどう感じるだろうか。

この物語は、おばあさんが亡くなったという、母からの一本の電話から始まる。

父の死後、千秋と母が偶然降りたった駅で見つけ、引っ越すこととなった大きなポプラの木の立つアパート「ポプラ荘」。そこで出会った大家の「おばあさん」は、少しとっつきにくく、近づきがたい難物であった。

ある日おばあさんは自分が「あの世の郵便屋」だという秘密を千秋に明かす。おばあさんがあの世への手紙を特別に「タダ」で届けてくれるというので、亡くなった父宛てに手紙を書くことにしたのだ。

当時まだ六歳であった千秋には、「死」の意味を理解することができなかった。ある日突然いなくなってしまった父は、「まるで漫画のなかの絶望的に不注意な登場人物のように、蓋の空いているマンホールにうっかり落ちて、消え失せてしまったも同然」であったのだ。いつか父のように、母も私も暗い穴に落ちて戻ってこれることができなくなるのではないかと恐怖を抱き、神経質になってしまった千秋は、手紙を書くことによって心に抱えたもの全てを、誰に気を使うこともなく、余計なことも考えずに吐き出すことができた。それと同時に、掃いても掃いても終わることのないと思っていた落ち葉掃きにも、いつか終わりがくることが分かったように、少しずつ父の死を自分なりに受け入れ始め、外の世界にありふれた「恐怖」へと立ち向かおうとする。この物語では、季節とともに変化するポプラの木と、子供から大人へと変化する千秋の心がうまくリンクしている。



当初は傷ついた母を見て、父のことは触れてはいけないと思っていた千秋だが、反抗期にさしかかると、いつになっても父の死に関して口を閉ざしてしまい、かたくなになってしまう母の態度に苛立ちを覚える。父が亡くなってから、母は千秋との間に壁をつくってしまっていた。それはどうしてか。「あなたは父と似ている」という母親の言葉の裏側には、一体何が隠されているのだろうか、これがこの物語の大きなキーワードとなっている。

過去の回想から一転、時は現在。大人になった千秋はまた、臆病であった。「臆病な子ども」は「臆病な大人」になったのだ。流産、失恋をきっかけに、看護師だった千秋は自信をなくし、仕事を辞めてしまう。そして毎日、睡眠薬を全部のみくだすことを唯一の未来にして、「あと一日だけ」を数週間繰り返していた。これもまた、臆病が故にであった。

そんな千秋は、おばあさんの遺体の待つポプラ荘へ、十八年ぶりに向かう。そこに待っていたのは、かつてお隣さんであった「佐々木さん」、「西岡さん」、そしてたくさんの「お仲間さん」であった。そして千秋はそこで見る光景に、思わず息をのむ。その時ようやく全ての真実、「おばあさんの正体」、「父の死の本当の理由」、そして「母がずっと抱えていたもの」を知ることになったのだ。

人は生まれた時からすでに、あの世へ向かって歩き続けている。そう、「生と死」というものは紙一重であるのだ。本書は「死」をテーマに取り上げているにも関わらず、非常に爽やかさの溢れる物語である。きっとあなたも読み終えた後には、なんだか少し切ないような、言葉にするのは難しい不思議な、優しい気持ちになれるだろう。

### 選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 柳下 浩紀

文章が読みやすく、書評の読者に分かりやすい書評が書けている、と思いました。書評の対象になっている作品は、戸田さんが言っているように、身近な人の「死」をテーマに取り上げながらも、爽やかさに溢れた物語でした。この対象作品を読み終えたときに、確かに「なんだか少し切ないような、言葉にするのは難しい不思議な、優しい気持ち」になったような気がしました。この作品は書き下ろしの文庫ですが、読者にそのような読後感を<sup>もたら</sup>すために計算されて、書かれているように思います。戸田さんは、とても的確な評をしている、と思います。また、この物語の主人公は「臆病な子供」から「臆病な大人」になった、と戸田さんは指摘しています。「あとがき」で、この物語の作者は作者自身のことをどのように評しているのか、主人公は作者自身をモデルにしているのではないか？、という疑問を投げ掛けるようで、これはとても興味深い指摘だ、と思います。

### 入賞者から一言



この度は賞を頂くことができ、大変嬉しく思います。正直とても驚いています。今回の書評大賞を通して、自分の伝えたい事を文章で表すということが、どれだけ難しいかを改めて痛感しました。これを機会に、更に質の高い文章を書くことができるよう、努力していきたいです。ありがとうございました。



佳作

 ひら お ゆう す け  
 平尾 悠祐


書名：『ゴールデンスランバー』

著者：伊坂幸太郎

出版社・出版年：新潮社，2010

### 「新たな逃亡劇作品」

誰しも一度くらいは、例えば道端を歩いている蟻を追いかけた経験があるのではないだろうか。その時は追いかけている蟻の事など考えていなかった。これも誰しも同じであろう。しかしこの本では、その蟻の立場に読者が立たされる事となる。そして相手は得体の知れない「秘密じゃない結社」に置換される。

本書は1960年代のアメリカで起こった、ケネディ暗殺事件がモデルになっており、物語の進行も一部、件の事件に準拠している。それでは結末が分かっているも同じではないか、という意見も出てくるであろう。事実、この本を手にとった時の私も似たような叫びをしたものだ。しかしそこはさすが伊坂幸太郎だ、とでも言うべきだろうか。かつての伊坂作品では幾度となく使われてきた手法である時系列の書き換えが、ここでも少し形を変える事にはなるが、冴えわたる事となる。

この物語は五部構成となっており、多少語り手は重なってくるが、それぞれ別の人物の視点から語られていく。第一部、「事件の始まり」で、ケネディ暗殺と同じ事が起こり、ラジコンのヘリコプターを爆発させることで、首相がパレードの最中に暗殺されるまでが描かれる。続く第二部、「事件の視聴者」で、殺人容疑の犯人が逃走し、最終的に投降するまでが、(語り手はテレビの中継を見ている第三者なので客観的ではあるが)描かれている。そして「事件から二十年後」の第三部でこの事件のあらましが一通り明らかになるのである。前述した私の叫びも、ここでひとつの決着をつける事になる。はじめに事件の一部始終を描く事で、私は次からの章を新たな気持ちで読み進めることが出来たのだ。ただ、この三部までだと、肝心の犯人像や、物語の核心には触れられずにいる。そこで第四部、「事件」の出番だ。この第四部は700ページ弱からなる本書の実に3分の2を占めている。ここでは、殺人容疑がかけられた一介の宅配ドライバーである、青柳雅春と、青柳が学生時代の頃に交際していた樋口晴子の二人が語り手となって章が進んでいく。

青柳は、物語が始まった時点では退職していたものの、どこにでもいる平凡を体現したような男なのだ。大学生の頃は、「青少年食文化研究会」という、ただファーストフード店で雑談を交わすだけのサークルに所属し、先述の樋口晴子や、「森の声」が聞こえるとのたまう、森田森吾。後輩のカズと毎日を過ごしていた。そんな男がなぜ今になり、首相暗殺なんて大それた事をしたのだろうか。答えは「やっていない」のである。青柳はただ何者かに濡れ衣を着せられただけなのだ。では「何者か」とは一体何者なのか。それはもちろん青柳自身も分かっていないし、事件から二十年が経過した第三部でもはっきりとは判明していないのである。そんな霧

のような相手に青柳は一つの対抗策を見出す。様々な人物から青柳に発せられる「逃げろ」という言葉。それだけを青柳は行い続けたのである。そしてその逃走劇の結末は第五部、「事件から三ヶ月後」に引き継がれる……。

この作品自体のテーマが、「態度も規模もでかい誰かの思惑で起きた、でかい理不尽な力に狙われて、逃げるしかない男の物語」という、重く、引き締まった内容だというのに、どこかとんとん拍子に読めてしまうのは、やはり著者の洒脱なユーモアのおかげだろう。会話と会話の間に織り交ぜられる軽快な言葉遊びは、他の伊坂作品を読んだことのある方ならすぐにピンとくるだろうし、まだ読んだことのない方もすぐに馴染めてしまうであろう。例えば、この書評の冒頭でも記した「秘密じゃない結社」というのも実はそのうちのひとつなのである。テンポよく進む会話劇は読者を巻き込み、ふと感じた時には青柳と一緒に、何者かから逃げている自分に気づくだろう。

そして全編を通して、バックで流れるのは、表題にもなっているビートルズの「Golden Slumbers」。「黄金のまどろみ」が直訳で、ビートルズ最後のアルバム、アビー・ロードの一曲。ポール・マッカートニーがバラバラになったメンバーをもう一度一つにしたいという思いで必死に作ったと言われている。青柳や森田もまた、劇中でこの歌を口ずさむ場面が何度かある。その度にかつてのポールのように、また四人揃って会える日が来ることを願っていたのではないかと推測する。

長々と記してしまっただが、兎にも角にも一度本書を手取る事をお勧めする。昔ながらの通り一遍の逃亡劇とは一味違う。勇敢とも蛮勇とも、もしかしたら惨めともとれる果てが待っているだろう。そして、全編を通して随所に散りばめられた、伏線に次ぐ伏線にも留意して読んでいただきたい。特に第三部と第五部ではそれが遺憾なく発揮されている。読了後、もしかしたらあなたにも「森の声」が聞こえているかもしれない。

### 選考委員による講評

### 選考委員代表 法学部教員 滝田 豪

私は本書が映画化されたことは知っていたが、映画を観たことはおろか原作を読んだこともなかった。その私がこの講評を書くことになった理由は、この書評を読んで興味を抱いたからである。その結果、本を読み、映画まで（もちろん家で）観た。少なくとも私に対しては、この書評は、書評の機能の一つをよく果たしたと言えるだろう。

それを可能にしたのは、本書自体の魅力とともに、書評者の読解力と文章力に負うところが大きい。例えば「秘密じゃない結社」という言葉は、私はこの書評を読んでいなかったら、気にとめることなく見過ごしていたかもしれない。ただ、書評としては、本書の魅力を伝えることには成功しているものの、もう少し別の角度からの“批評”があると、より高い評価が得られたと思う。本書が娯楽性の強い小説であるため、それは難しい注文ではあるのだが。

### 入賞者から一言



今回は「佳作」というすばらしい賞を受賞させていただき誠にありがとうございます。このような経験は初めてですので、稚拙な点も見受けられたかと思えます。ですが、書評を書くことによって、小説を読む楽しさを知ることができたのは、とても喜ばしい事だと思えました。また来年以降も応募する機会をいただければと思います。



佳作

よこい たかあき  
横井 隆明

書名：『青年は荒野をめざす』

著者：五木寛之

出版社・出版年：文芸春秋，1974

## 「『青年は荒野をめざす』」

「夢をみることこそが若者の特権」と言ったら、言い過ぎだろうか。

昨今、長引く不況によるためか、はたまた別のところで日本人そのものが変わってきたためかは分からないが、「夢が持てない現代人」などといった表現をよく見聞きする。時代が変わったから——、そう言われればそれまでかも知れないし、本当にそうなのかも知れない。現に、日本ではバブル経済の崩壊を契機に自殺者やうつ病患者の数は急速に跳ね上がり、人生に希望が見出せなくなった人は多いとされている。身近な話をすれば、我々大学生も不景気の煽りを直に受けており、新規卒業生を中心とした若者の就職難は慢性化しつつある。しかし、夢や希望を持つことそのものが時代や年齢などに左右されることなんて、本当にあるのだろうか。ただ、夢を持てないことに対する理由を自分の外に探しているだけではないのだろうか。今回取り上げる書、『青年は荒野をめざす』の中には、その厳しい問いかけの答がある。

本著の主人公ジュンは、トランペット奏者として成功したいという夢は持ちながらも、人生を模索している最中の青年である。物語は、このジュンが船で日本を発つところから始まっており、モスクワから北ヨーロッパを経て、ジャズの本場であるアメリカに向かう姿を追っていくかたちになっている。

物語の冒頭、ジュンが、船の中で知り合った女性麻紀から、なぜヨーロッパに行くのかと問われ、「さあ」と答える場面がある。ジュンは高校生の頃からトランペッターとしてジャズクラブのセッションなどに参加しており、当時から将来はトランペットを生業としたいと考えていた。この旅に出るのも、様々な人や音と出会って音楽というものを勉強するためという目的があったからなのだが、咄嗟の質問に、「分からない」と答えるのだ。私は、初めて本著を読んだ時からこの場面がとても強く印象に残っている。夢はありながらも、本当にそれがしたいのかという自分自身に対しての密かな問いかけや、他人に聞かれた時に思わず口籠ってしまう若者の弱さを、よく表わしていると感じるからだ。

本著は、音楽の専門的な話や旅をする各国の描写などもさることながら、登場人物に一番の魅力がある。ジュンはこの旅の中で様々な人と出会う。モスクワではリューバという女性と初めて関係を持ち、旅を共にする麻紀やケンといった大志溢れる仲間達から大きな刺激を受け、ジュンはそこから自分自身について考え、そして成長していく。その中でも、一際目立つのがプロフェッサーの存在である。プロフェッサーはジュンが乗り込んだ船の中の一員で、地方大

学の教師の職と家庭を捨てて旅をする男である。そのプロフェッサーが物語最終盤、このようなことを言っている。

「男たちは常に終わりなき出発を夢みる。安全な暖かい家庭、バラの匂う美しい庭、友情や、愛や、優しい夢や、そんなものの一切に、或る日突然、背を向けて荒野をめざす。だから彼らは青年なのだ、それが青年の特権なんだ。(中略)そしていま、若い君たちとヨーロッパを南下し、何が待っているかわからないアメリカへ行こうとしている。つまりわしも荒野をめざす青年の一人なのだ。そうじゃないか、え？」

これはまさしく本著の核心を突く台詞であり、著者が一番伝えたかった思いではないだろうか。プロフェッサーはまた、「青春は、その人の気持ちの持ちようで、何回でも訪れてくるんだよ」、とも言っている。荒野をめざしたその瞬間、誰にでも何度でも、青春はやってくるのだ。

本著が書かれた1960年代は、若者たちにとって激動の時代であった。イギリスやアメリカを中心にロックンロールが一大潮流として栄え、アルコールやドラッグを片手に、誰もが夢を抱いてロックスターを目指した時代である。私は、本著にはそういった熱い時代の血が今も脈々と流れているように感じてならない。だからこそ、本著に古さは全く感じない。荒野をめざすこと、夢をみることこそが若者の特権であり、若者が若者たる所以なのだというプロフェッサーもとい著者である五木寛之氏の不変の言葉は、夢を持ってなくなったと言われる現代の若者に向かって今もなお、本の中から訴えかけている。

### 選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 柳下 浩紀

書評の対象になっている文芸作品が持っている雰囲気をよく伝える書評だ、と思いました。そのような書評が書けている理由は、この小説の中で登場人物たちが発している台詞の中から、横井さん自身が共感を覚えて、印象に残った言葉を念頭に強く置いて、この書評を書いているからではないでしょうか？ 私は普段はほとんど小説を読まないのですが、横井さん自身も言っているように、この小説には、この小説が書かれた時代、1960年代の後半の小説の一つの傾向が、あるいは、もっと大きく、その時代の小説の傾向だけではなくて、その時代の日本の雰囲気が「今も脈々と流れているように感じて」なりません。そして、この小説に流れているその「血」をこの書評はしっかり受け継ぐことに成功しているのだ、と思います。強いて注意点を書けば、麻紀やケンの「大志」はジュンとの出会い以後に抱いたものですし、プロフェッサーは船旅以前からのジュンの知り合いで、知り合った時点で既に職や家庭からは離れています。

### 入賞者から一言



この度はこのような賞を頂けて、嬉しく思います。後輩の皆さんに、大学生の今だからこそ是非この本を読んで欲しい、ただその一心で今回、この書評を書かせて頂きました。想いが伝われば幸いです。

# 第7回 京都産業大学図書館書評大賞アンケートから (抜粋)

書評の応募時にアンケートにご回答いただきました。ご協力ありがとうございました。  
その一部をご紹介します。

## Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- ゼミ等の課題・教員からの推薦。
- 自分の可能性を広げたいがために応募させていただきました。
- 友人が昨年の書評に応募したのを聞いて興味が湧いたため。
- 自分の大好きな本が、自分の書評をきっかけに読んでくれる人がでたらいいなと思ったから。文章を書くのが好きだから。
- 一回生のころから応募したいと思っていたが、部活と教職が忙しく無理であったが、今年のはじめて間に合った。
- 文章を書く練習のために応募してみました。

## Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| ✚ 興味のある分野だから (34人) | ✚ 図書館で見つけたから (11人) |
| ✚ 先生からの推薦・指示 (13人) | ✚ 話題の本だから (7人)     |
| ✚ 好きな作家だから (29人)   | ✚ その他 (14人)        |

## Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

### 「はい。」(64人)(理由)

- 難しかったが、書き終えたとき達成感が感じられて良かった。
- 本を読むいいきっかけになるから。
- 読むだけだった本を評するというのが楽しかったのだ。
- このような機会はあまりないので、是非チャレンジしたい。
- 書くことで、より本の内容を考えることが出来たと思うからです。

### 「いいえ。」(32人)(理由)

- 卒業するから。
- 論評を書くのは難しいから。

## Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

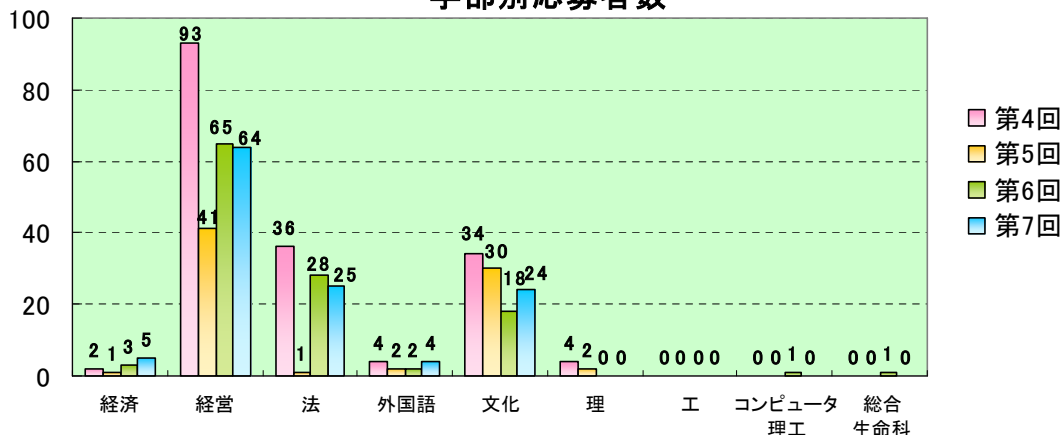
- 意外と楽しかった。
- 書評という今まで書いたことのない形式にとっても苦労した。
- 書評を書くのは初めてでしたけど、自分の中でその本に対する思いが整理され、理解が深まるようで面白かったです。
- 提出方法が少し複雑だと思いました。
- 自分の考えをまとめることがこれほど難しいのかと痛感した。
- 初めは、書けるかなと不安がありました。でも、好きな本だったので、書きたいことがすらすら出てきました。
- 授業のテストの論述より難しいなというのが正直な感想です。一から構成していくのがとても難しく、思ったより大変でした。
- まとめるのも文章力の一つかもしれないが、もう少し制限字数に余裕が欲しかった。
- 読んで自分の中で消化することは出来ても、それを誰か他の第三者に簡潔にわかりやすく伝えるという作業はとても難しいということをこの機会を通して実感しました。
- 客観的な分析を文章にする、というのが特に難しかったです。
- 書評を「書く」ということで、本を「読む」だけでは気づくことができなかつたものも多く見えてきました。

## Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

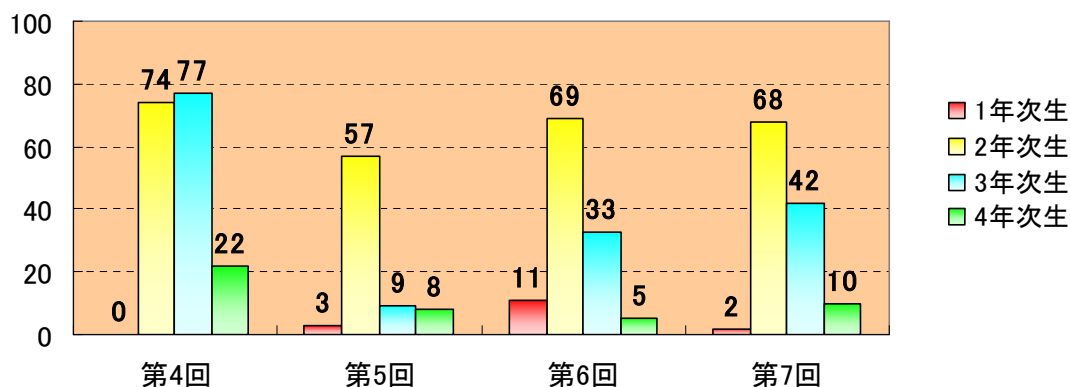
- 誰もが知っている有名著者なら一度聞きたいと思う。
- これからも継続して講師の方を呼んでいただきたい。
- 希望する講演会講師  
川上未映子・荒木飛呂彦・金城一紀・東野圭吾・重松清・有川浩・村山由佳・江國香織・森見登美彦・道尾秀介  
沢木耕太郎・乙一・古川日出男、芥川賞などの受賞者

# 第7回 京都産業大学図書館書評大賞 統計

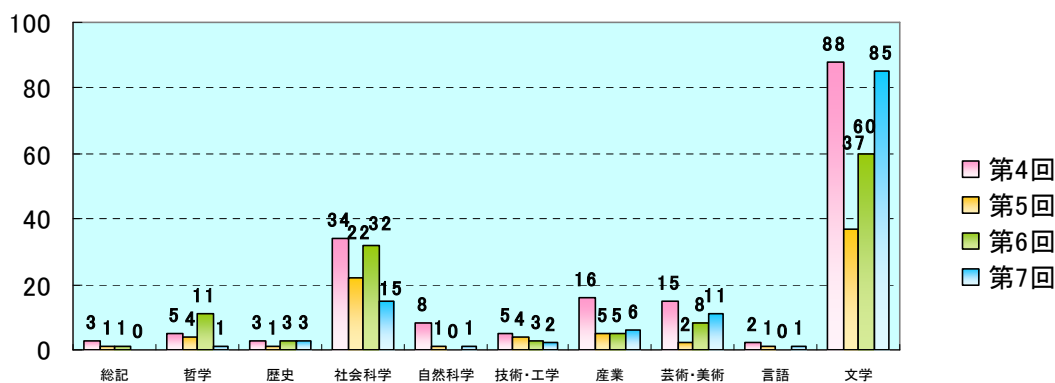
## 学部別応募者数



## 学年別応募者数



## 対象図書分野別冊数



学部別応募者数は、経営・法・文化学部が多く、前回とほぼ同じ傾向を表しています。理系学部の学生の応募がなかったのは残念でした。

学年別応募者は、こちらも前回とほぼ同じ傾向で、2・3年次生の応募が多くなっています。4年次生は少し応募者が増えましたが、1年次生は減少したので今後の応募を期待します。

対象図書の分野別冊数は、文学が圧倒的に多くなっています。日頃読み慣れている小説の書評を書きたいという気持ちの表れかと思いますが、自分の専門分野の本など、文学以外の分野の書評も期待しています。

## 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

## 応募要領（抜粋）

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生

2. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字以上 2,000 字以内。原稿はマイクロソフト社の Word を使用して作成すること。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであること。（剽窃厳禁）
- (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし受賞は 1 人 1 篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

## 応募総数

122名125篇

## 実施日程

応募期間 平成23年6月1日（水）～9月30日（金）

入選発表 平成23年11月30日（水）

表彰式 平成23年12月22日（木）

## 選考委員より 一言

書評大賞も回を重ねてきたが、再検討の時期だろう。大学での勉学を活かして、高校生のときには読めなかった本に挑むとか、作品に没入して感想を述べるだけでなく作品について論じるとか、そういう意識が必要だ。（小田）

批評することを前提に本を「読む」という行為は、単に与えられた情報を受け取る受動的な行動ではありません。そこから何を読み取り、どのように感じ、何を獲得するのかを意識することが求められます。評者の皆さんは、書評を「書く」ということをとおして、「読む」ことをより深く理解されたのではないのでしょうか。（諏澤）

想像以上に小説の書評が多かった。小説の書評を書いたことがない私は、ストーリーを明かす程度や、感情移入と批評のバランスなど、特有の難しさを感じた。社会科学的本の方が書評しやすいと思ったが、とっつきにくいかもしれない。（滝田）

書評の魅力と難しさは、おそらく、作品の中に発見した一番の宝をそっとそのままに受容しながら、読者のために沈黙を守るところにあるのでしょうか。今回も多くの素敵な書評に出会う喜びを経験させて戴きました。（森）

普段は文芸的な作品にほとんど触れていないので、今回の書評大賞は、とても良い機会になりました。書評を評することは（文芸的な作品に慣れていないのもあると思いますが）とても難しく、書評を書くことはもっと難しかったのではないかと、と思います。（柳下）

タイトルは何を伝えたいのかを凝縮して表現するもので、『●●』を読んで」という形では、読む前から単に感想文なのかと思われてしまいます。入賞作は工夫されたタイトルが多く、さすがだなと感じました。（天竺）

書評を審査することで今年も多くの名著に出会うことができました。書評大賞をきっかけにより多くの方が未知なる図書を知り、読書の楽しさ・面白さを知ることになればさらにうれしいです。惜しむらくは、「・・・と思った。」といった感想文的な書き方ではない、読み手を説得するような論述がされた書評が少なかったことです。次回に期待します。（池田）

新聞で書評欄を担当されている作家の川上未映子氏は、書評の役割とは「共感でも驚きでもとにかくなにかに刺激されて、思わず手に取りたくなるようなその本の『良さ』を伝えること」と評されています。日曜日の新聞各紙に掲載される書評も書き方のヒントになるのではないのでしょうか。（今井）

先日、ある作家が小説を書くことで世の中や社会の風潮について考えることをしてきたと話すのを聞いた。書評大賞の応募者も「書いて考えが深まった」と言う。書評を書く意義も「考える」ことにあると思った。（近江）

なんでやねん。なんでこうなんねん。批判や分析のきっかけは疑問をもつところから。素直な気持ちの表現はわかるけれど、内容のまとまり毎の段落がなくて、分析が少なくておいしいと思う作品がありました。（真部）